

日本語の科学用語を大切に

井藤 芳喜

ITOH yoshiki

所属 無

科学史 術語 カタカナ 教育用語 科学用語 教科書

はじめに

最近は外来語や外来語もどきのカタカナ文字が氾濫している。本来日本語では表すことができない外来語や、日本語では少し意味が異なる場合にはやむをえないこともあるが、立派な日本語があるにもかかわらず、外来語を用いる風潮がある。例えば「催物」を「イベント」と言っているし、会議などでは「価値がある」「価値がない」を「メリット」「デメリット」などと平然と使っている。聞く方も次第に馴らされて、れっきとした日本語があることを忘れているのが現状である。

理科教育で使用されるカタカナ外国語表記の経緯と現状

筆者が戦前に習った尋常小学理科書でのカタカナ表記は、ガラス、アルコールランプ、ガス（4学年）、コークス、コールタール、レール、リトマス、アルカリ、アムモニア、ソーダ（5学年）くらいである。現在の中學に相当する高等小学理科書でもバクテリヤ、パン、ランプ、セルローズ、セロファン、レンズ、コイルなどの日本語に無い外国語と、単位の類、外国名の元素、宝石、病名などである。その他に中・高等学校の理科の時間に使用したカタカナ語は物理ではエネルギー、サイレン、ポンプ、化学ではイオン、生物ではビタミン程度である。今日普通に使われているアルカリは塩基性、ホルモンは内分泌腺のように、可能な限り有意な漢字で表現されていた。しかし、中には音だけを漢字で表した「攝氏ニセルシウス」「華氏ニファーレンファイト」なども漢字が使われていた。

昭和22年度の学習指導要領理科編では今日のように動植物名をカタカナで表すようになり、カナ文字が多くなっているが、その他の表現は戦前のものと特に変わっていない。

最近の教科書では電気関係だけでもスイッチ=開閉器、アース=接地、コンデンサー=蓄電器、トランス=変圧器、モーター=電動機など、しだいに外国語のカタカナ表現が使われてきている。

多くの科学用語や哲学用語は日本で作られている。

漢字は元来中国から來たもので、これも外来語だという者もあるが、江戸末期から明治維新にかけて西洋文化が到來した当初、それまで日本に無かった科学用語や哲学用語は、漢字を素材にして、日本で作られたものが多い。例えば、電気に関する用語は一九世紀以前は日本にも中国にも見当たらない。一説によると電気の電の字も雷が元で下側の「ひげ」は稻光を指したものとのことである。従って、彼のフランクリンが雷が電気であることを立証した以後に「電」の字を使った電気用語は出来たはずである。この電気に関する種々の概念、例えば電圧、電流、電位などは電気の概念を心得た者が考えたものと言える。すなわち、電気の概念は流体力学の流れの概念と同様で、水圧、水流（単位時間に流れる水量）、水位などから作られている。これらの二字熟語の多くは江戸末期から明治初期に掛けて、科学をよく理解した日本の先駆者たちが作成したものである。もしも英語の Voltage, Current, Potential を翻訳するならばこれらの語句は出来なかつたことは容易に想像できる。文明開化の時代に西洋文化の輸入の媒介を果したオランダ語やポルトガル語でも同様である。

有意な漢字術語を大切に継承伝達したい。

本研究では漢字表記とカタカナ表記の利点や欠点を明確にして、学校教育で使用されている用語の統一を提案するものである。物理用語に限定して述べると、トランス、コンデンサー、モーターなどは古くは変圧器、蓄電器、電動機などと表現していた。漢字で表わすと意味が明確で、その内容を簡単に理解でき、大変便利である。最近は学術用語を教科書に採り入れているが、一般の辞書に無いような不適当な用語もある。エネルギー、ダイオードの様な既に普及している外来語をあえて漢字に切替える必要もないが、かつて我々の先駆者たちが苦労して作成し普及していた、意味を持った科学用語は、その内容が理解しやすいので、大切に継承伝達し使用したいものである。